

---

## 包括的支援を担うそれぞれのソーシャルワーク実践～社大から紡がれる新たな力～

### <シンポジスト>

社会福祉法人福岡県社会福祉協議会 生活支援部 / 社会福祉学部 60 期 2020 年卒業 谷 本 和 駿  
法務省 少年院勤務 / 社会福祉学部 58 期 2018 年卒業 笹 沢 梓  
社会福祉法人昂 理事長 / 社会福祉学部 39 期 1999 年卒業 丹 羽 彩 文  
社会福祉法人芳香会茨城県地域生活定着支援センター センター長 / 社会福祉学部 36 期 1996 年卒業 /  
大学院博士前期課程 14 期 2004 年修了 酒 寄 学

### <助言者>

文京学院大学人間学部 人間福祉学科 学科長・教授 / 社会福祉学部 34 期 1994 年卒業 / 大学院博士前期課程 6 期 1996 年修了  
中 島 修

### <進行>

専門職大学院講師 / 社会福祉学部 36 期 1996 年卒業 北 川 進

---

### 1. 趣旨説明

日本社会事業大学大学院 福祉マネジメント研究科  
北川 進

本日は、北は東北、青森、南は九州、宮崎、大分など遠方からたくさんの方々にご参加いただき、大変感謝申し上げます。本日、司会を務めさせていただき、日本社会事業大学専門職大学院の北川です。はじめに、本自主企画分科会を開催する趣旨をお伝えさせていただきます。

私は 1996 年に学部を卒業後、児童養護施設勤務を経て郷里に戻り、長らく県の社会福祉協議会に勤めていましたが、昨年 3 月に退職し縁あって本学専門職大学院の教員をさせていただくことになりました。約 30 年ぶりに社大に戻りましたが、コロナ禍明けもあってかキャンパスに活気が感じられず、また、ご存じの方もいるかと思いますが、昨年度、一昨年度には学部生が定員割れを起こし、社大の歴史上、非常に危機的な状況に陥っていることを知りました。この状況下において、卒業生でもある教員として何ができるだろうと考えたとき、社大の最大の強みと言っても過言ではない卒業生としてのつながり、ネットワーク力を活かしこの学内学会に集い、危機的な状況を卒業生に知ってもらうこと、そして各地から母校を支えてもらうことと、卒業生が持つネットワーク力を

学生たちに知ってもらい、社大を盛り上げられないだろうか、との思いから企画を実施するに至りました。なぜ、社大のつながりは強いのか。そう考えたときに、学生数が少なく顔の見える関係が構築しやすい環境と、そして、同じ目標に向かって時にはぶつかり合い、時には笑い合いながら同じ時間を過ごした密度がそこにはあったからではないかと思ったのです。とりわけ、準硬式野球部での時間はその密度が特に濃かったのではないかと、自分自身の実体験から思います。これは、人との関係を構築していくうえで、非常に重要な要素ではないでしょうか。

今、社会では地域共生社会の実現に向けて、包括的支援体制の構築が求められています。これまでの取組みを活かしつつ、他領域が重なり合いながら連携協働をしていくためには、他者との関係構築、他者とのつながりが大変重要です。社大の学生生活で培われたつながりは、今の包括的な支援を実践するうえでも共通項があるのではないかと考え、やや強引さは否めませんが、本企画のテーマを「社大から紡がれる新たな力」と題させていただきました。

本日は、様々な立場から実践報告をいただくだけでなく、登壇者の皆さんが学生生活、特に野球部での活動を通じて得たつながりはなぜ生まれた

のか、今にどうつながっているのかをクローズアップしていきます。この時間を通じて、つながりの大切さ、私たちの持つつながりの力がさらに発展していくことを実感できればと思っています。

## 2. 登壇者自己紹介「私と社大、そして今」

### (1) 社会福祉法人福岡県社会福祉協議会 生活支援部

谷本 和駿 氏

福岡県福岡市出身。2020年福祉計画学科卒業。中学時代は野球をしていましたが、高校ではバレーボール部に所属していましたが、社大に入学して先輩に声をかけられ、断り切れず入部。入部当時は3部で最下位争いをするようなチームでしたが、先輩、後輩の力を借りて2年生のときに2部へ上がることができました。部員とぶつかり合うこともあり、一時は野球部が嫌になり実家に帰ったこともありました。その時は坊主頭にして反省の意を伝えたこともありました。そういったぶつかり合いを経て、何とか2部でも戦えるチームになっていったのだと今、振り返ることができます。

入学時は児童分野に関心がありましたが、実習で社会福祉協議会へ。高齢・障害・児童という枠に捉われない支援に魅力を感じ、卒業後は地元である福岡県社協に就職できました。地域福祉の推進を図る役割として、市町村社協との連携、研修の企画運営、災害ボランティアセンターの設置等を担っています。現在は生活福祉金貸付金業務を担当。貸付金の審査を行っていますが、単に資金の貸し付けを行うものではなく、“その世帯にどのような支援が必要か”という視点で日々業務に取り組んでいます。また窓口業務を行う市町村社協の力量を高めるための取り組みも行っていきたいと考えています。

### (2) 法務省 少年院勤務

笹沢 梓 氏

そもそもは野球に何か思い入れがあったわけではなく、寮の食堂で巨人戦をなんとなく観ていたところ野球部の先輩に声をかけられマネー

ジャーになることになりました。選手を9名そろえることに苦勞する状況で、一つ下の後輩が練習方法や方向性の違いから集団退部し更には3部降格。その後、後輩（谷本さんら）の入部があり、また応援してくれる中山先生やOBの岩附さんの存在もあって、再び2部に昇格する喜びを体験できました。そんな様々な出来事や人間関係の中で、大学時代の自分は他者や物事と少し距離を置いた傍観者であったように思います。

野球部の入部と同様に就職に関しても明確な意志はなく、先生から勧められ「対人支援で公務員なら」と少年院へ入職することになりました。正直、職務への熱意や信念などなく、ぼんやりと決めた職だったのですが、その後、すっかり魅せられ熱中しています。ただ、その塀の中の生活に感化されすぎて、本日は社会通念である名刺交換（用意）を失念していた自分に驚きました。野球部時代の紹介写真の服装（白いインナーに紺のアウトター）を見て、今日の自分の服装とまったく同じであり、趣向は当時と変わっていないのかと自分自身で笑ってしまいました。

### (3) 社会福祉法人昂

理事長 丹羽 彩文 氏

確かあれは、入学を検討していたオープンキャンパスに参加した時です。乗車していたバスからグラウンドで練習する野球部の姿が見えました。そこには、ユニフォームを真っ黒にして練習している人たちがいて、正直心の中で「大学生にもなってよくやるなあ」と思ったことを覚えています。それが、入学後、先輩からお声掛けいただいたことキッカケに、気がつくとも自分もそのグラウンドに立っていることになりました。

私は寮生活もしていましたが、寮には野球部の先輩もたくさんいて、色々な思い出があります。試験前に飲み連れ出されたり、ギューギュー詰めの車に乗ってあちこちドライブしたり、当時「迷惑」な感が少しはあったものの、先輩、その後は後輩と野球部を通じた濃い仲間のつながりができました。その経験は、自分の人間関係を構築する

際の礎になっているのだと思います。今でも、社大時代に培われた先輩、同期、後輩らとのつながりは、大切にしています。

今日参加してくれている現役の学生の皆さんも、野球部の活動に限らず今、社大で出会った人たちとのつながりを大切にしてもらいたいです。それは、きっと将来のソーシャルワーカーという専門職としてのつながりにもきっと生きてくるはずです。

#### (4) 社会福祉法人芳香会茨城県地域生活定着支援センター センター長 酒寄 学氏

私は3年生春から野球部に入部させていただきました。途中入部ながら、野球部では一部優勝を果たしたりする一方で、4年生最後の秋には二部降格を味わうことにもなりました。学生生活でも1年生時に8科目の単位を落としてしまい、その一方で4年生時にはMr. 社大に選ばれるなど、学生生活の中でも、浮き沈みがあったと振り返ります。

社大での生活から得られたものは、①良い時も悪い時も、長くは続かない②悪い時には、支えてくれる人が必ず現れる＝(諺にすると)「人間万事塞翁が馬」「禍福は糾える縄の如し」です。これらの教訓があってこそこの社会に出てからのソーシャルワーク実践となっていると自分なりに思っています。

社大卒業後、1996年に茨城県にある社会福祉法人芳香会に入職し、生活指導員、介護支援専門員、相談支援員を経た上で、2011年に茨城県地域生活定着支援センターの管理者となり現在に至ります。地域生活定着支援センターにおける【罪を犯した障害者・高齢者の支援】では、「差別」「偏見」「排除」との闘いの日々で、悲観も、楽観もせずに、粛々と社会の現実と闘っているつもりです。

### 3. ミニレクチャー 「今、問われる包括的支援の取組み」

文京学院大学 人間学部

人間福祉学科長・教授 中島 修氏

#### 【自己紹介・社大と私】

社大と私を考えたときに、大学時代のつながりがその後の私の様々なネットワークに関連しているということに気づきます。大学1・2年時には東京都の山野対策事業として行われていた日雇い労働者の支援を年末年始に経験させてもらいました。後の厚労省地域福祉専門官時代に生活困窮者を対象とした公設派遣村を設定した際、野球部時代の先輩に山野対策でお世話になった方々と連携して取組むことになります。大学3年時にはゼミの先輩からの紹介により練馬区社協ボランティアセンターでアルバイトをさせてもらいました。そのご縁もあって、練馬区社協とは30年来のお付き合いで、当時のキーパーソンが退職後も、事業実施や実習などを通して、今でも良好な関係を続けさせてもらっています。卒業後には社大のような大学を作りたいとの思いから、某県立大学の創設に参画させてもらいました。東日本大震災の折には、同県の支援で地域福祉専門官として訪問しましたが、県立大学で助手として勤務をさせていただいていたつながりが様々活かされました。そして、母校の社大に戻り実習教育室の実習講師として勤務させていただいたことは、現在に至る大学教員として働かせていただく上で重要なつながりを得ることになっています。

#### 【今、問われる包括的支援の取組み】

コロナ禍でも重要な役割となった生活困窮者を支える生活福祉資金事業を担う社会福祉協議会、様々な難しい事情を抱える青少年を支える少年院の取組み、障害者の地域生活の実践を担う社会福祉法人、刑余者の出所後の生活を支援する地域生活定着支援センターの取組みなど、このあと、実践報告をいただく方々が、皆、社大野球部であることに驚きを覚えます。

報告者の皆さんが取組む狭間にある方々の相談に応じ、自宅以外の居場所を作り、社会とのつ

ながりを作ることが、今の日本の福祉は弱いのでそういった部分を再構築し、かけがえのない自分をどう取り戻していくか、自己肯定感の回復、自尊心をどう高めていくかが大変重要になっています。

高齢の親と無職独身の子どもがいる 8050 問題、ダブルケア、ヤングケアラーなど複合化した課題が表れていますが、高齢者の地域包括ケアシステムのような医療、保健、介護、予防、住まい、生活支援など包括的な支援をあらゆる分野で取組もうよ、ということです。例えばごみ屋敷と呼ばれる問題は、ご本人がごみと言わなければごみではないわけですし、要介護の認定を受けているわけでもなく、精神保健福祉手帳を持っているわけでもない方がいます。まさに、対象とならなかった人たちをどう支えていくかが課題になっています。また、今後は東京を中心に単身化が進んでいき、社会的に支援が必要な単身者が増えていった場合どうするか、そういったニーズがたくさん増えていった際に、相談機能と権利擁護など意思決定支援の機能、そして安心できる居場所、それは物理的な場に限らずメタバースや SNS などの空間でもよく、色々な形でアウトリーチが大切になってくるということです。

豊島区の例をもって説明しますが、重層的支援体制整備事業です。もともと、豊島区には 24 名のコミュニティーソーシャルワーカーいて先進的な取組みをしていましたが、行政の中にも包括的な支援体制を作ろうと取組んでいます。従来の支援の仕組みとしてそれぞれの窓口が相談に応じてつながっていくだけではなく、行政の 13 の課が集まって複合的な課題に対応していこうと、福祉部署だけでなく教育委員会や水道部署、国保関連、住宅関連などが集まれるような体制を作り、漏れない支援を行えることを目指しています。

時間が限られており丁寧に説明ができませんが、このように、利用者を包み込むように支援ができる体制をどのように構築していくかが議論になっているので、このあとの皆さんの報告から深められたらと思います。

#### 4. 実践報告「包括的支援を担うそれぞれの実践」

##### (1) 社会福祉法人福岡県社会福祉協議会 生活支援部

谷本 和駿 氏

コロナ禍の生活福祉金特例貸付は、生活福祉資金の一部の要件を大幅に緩和し貸付を行ったものであり、償還免除の特約付きの貸し付けとなっています。コロナ禍前、東日本大震災と比較しても、類を見ない貸し付けの件数となっており、段階的に受付期間や規模が延長・増大され、支援の見通し、社協の人材確保に苦慮してきました。特例貸付を契機に社協の認知度が高まっている中、改めて貧困と向き合う必要があると感じています。

世界的なパンデミックの中、迅速に資金を送金することが優先され、十分な相談支援がなされない現状があり、命や生活をつなぐことができた一方で、問題を先送りにしただけだったのではという葛藤を抱えていました。多重債務、慢性的な困窮、貸付だけでは解決しきれない問題が顕在化し、本当に貸付という形が望ましかったのかという思いもありました。申請や相談を窓口として担ってきた市町村社協では自分以上の葛藤があったのではないかと思います。

また令和 5 年 1 月から償還が開始される中で、フォローアップの支援の必要性が強調されています。償還免除になった方、償還免除にするための手続きが難しい方、償還免除にならないが償還が困難な方など、それぞれの状況に沿った支援が求められています。実際は本人が「変わりたい」という気持ち、支援を求める気持ちがなければ、その世帯に介入するのは難しいですが、だからこそ、いつでも社協が相談に乗るという姿勢をとることが大切ではないかと考えています。

さらに制度上の課題もあり、社会保障・セーフティネットの見直しの必要性を感じています。生活保護は入りづらく出づらい、つまり保護を受けることが難しく保護から脱却することも難しい制度であり、そこには社会のスティグマもあります。また住居確保給付金などの制度もありますが要件が厳しいという居住支援の脆弱性があり、制



度の在り方の見直しが必要なのではないかとも思っています。

貸付金業務を行う中で支援を必要とする新たな層が顕在化もしました。九州の各県から流入がある福岡県には、生活基盤が弱く複合的な課題を抱える世帯（多子、障害、一人親、海外にルーツがある、多重債務等）が多くいらっしゃいます。そのような世帯を支援するためには、単一の支援ではなく多機関連携が不可欠であると考えます。そのためには、コロナ禍で途絶えていたつながりの再構築が必要なのではないでしょうか。初心に帰り、顔の見える関係性をつくるために、県社協として対面での勉強会や意見交換会の機会を設けていきたいですし、社協は協働の中核であり、地域のつながりの中心にありたいと考えています。個人としては自分に相談してもらえるような信頼関係づくり、自身が行き詰まりを感じた時に頼れるような外側に向けた関係づくりなど、これまでとこれから、多くのつながりを大切にし、自分の仕事に還元できたらと考えています。

## （２）法務省 少年院勤務

笹沢 梓 氏

入職して３年間は直接的な支援業務ではなく庶務課会計係で勤務し、労務や予算、収支などの運営管理に携わり、４年目から念願の処遇部門（集団寮）へと配置されました。現在は在院生の個別担任を勤めながら、当直と日課をこなす日々を過ごしています。現在勤務している施設では、在所者４０名程度に対し、１０～１５名程度の職員で処遇を行っています。私自身は４名程度の個別担任を受け持っています。主に個別面談と集団生活の指導を組み合わせる形で処遇を進めていきます。「生活指導」「教科指導」「職業指導」「体育指導」「特別活動指導」、最近注目されている「被害者心理理解指導」など内容は多岐にわたります。

少年院の入所理由は一般的なイメージの非行や傷害暴力事件とは異なっており、薬物や詐欺など、現在の世相が反映されたものとなっていると感じます。個別担任として、在院生と関係を

つくり、これまでの生活を振り返り、心理教育や社会性の習得などの指導を繰り返し行っているところ です。

在院生の傾向は統計になかなか現れ難いのですが、現場の実感として「医療的・福祉的支援を必要とする者の増加」「支援者との関係を構築する上でのつまずき・支援希求力の低さ」「家族関係の不和からくる不遇感・愛着形成の問題」「生きづらさをしのぐための非行（不良文化への親和）」があげられます。教育や福祉関係の支援者への傷害暴力が事件化されるケースも多く、対人関係の基盤たる、他者への信頼感が持てないが故に起きているように感じられます。そのような背景もあり、少年院の教育も集団を小さくする、個別にするなど、個々の課題に応じた教育に力を入れるようになってきています。

処遇上の困難さとして、少年院後の帰住先および社会復帰支援の難しさがあげられます。在院生の希望だけではなく、その非行内容や保護者の意向、保護観察官の意見や調整内容、施設の空き状況などにも左右されることになります。支援者への傷害暴行歴のある少年の引き受けを依頼できるか、といった関係者・機関での調整も困難を極めている状況です。

また少年院も福祉現場と同様に、社会の変化や施策の変化に合わせた処遇を求められています。近年では成人年齢が引き下げられ、被害者心情伝達制度、拘禁刑の導入などで、少年による大きな事件が起こる度に制度が見直され改定されることが多く、現場はその都度「研究授業」「新たなプログラムの導入」など慌ただしく動くこととなります。

実践の中で少年院の限界も感じる場面も多いです。複合的な課題を抱えた少年をどう社会処遇につなげるのか。少年院は、ある意味では安全な社会生活に向けて緊急入院するようなものとも言えますが、半年や１年の期間で再び社会へ戻っても必ずしもうまくいかないのが実情です。少年院が手厚くなればなるほど、一般社会とは異なる環境となってしまう、うまくいかないのではないかと

と思うこともあります。少年院が社会とどうつながっていくのか。社会資源として少年院の役割を模索する中で、関係機関や活動団体支援者などとの連絡調整や連携強化が重要だと感じています。

コロナが5類となり、参観も再開しているので、ぜひ多くの方々に来てほしいと願っています。

### (3) 社会福祉法人昂

理事長 丹羽 彩文 氏

私が所属する社会福祉法人昂は埼玉県のほぼ中央部にある東松山市を含む比企地域、深谷市といった地域で、地域福祉を志す法人として、小児科の診療所や障害福祉サービスを中心とした事業を展開しています。

今、力を入れているのはバリアフリー演劇です。演劇には4つのバリアがあると言われてます。一つには地理的なバリア。劇場は都市部にしかなく、離島や地方には劇場を地域の体育館で作ってしまいます。二つ目が障害によるバリア。字幕や舞台手話通訳者、音声ガイドなど、どんな人でも「一緒に」演劇を楽しむことができます。三つ目が客席と舞台のバリア。演劇は見る側と見る側として分けられてしまう。この劇団の演劇は見る側が舞台に上がってもいいのです。四つ目が内なるバリア。障害があると、わからないだろうと親や支援者が、そもそも劇場へ連れていけない。このようなバリアを全て超えて観劇すると、とても居心地のいい空間ができます。

埼玉県では中学生になると3日間自分の好きな職業体験ができ、障害がある生徒は障害者支援施設を自分で探して来るように言われます。それが将来の前提になっては面白くないなと思い、東松山市自立支援協議会で、特に障害者雇用をしたことがない企業を中心に声掛けし、職業体験の場を提供してもらっています。市内にある県立動物園、ショッピングモール、工場、病院などが参加し、障害のある人を雇える、こんな仕事ならできるかもなど企業側も学ぶ場になっています。

また社協と一緒に買い物困難者へのパンの移動販売支援を就労継続B型でやっています。障

害がある人たちはサービスの受け手になることが多い。そうではなく自分たちでできること通じて地域での役割を担っています。

ソーシャルワーカーは台湾では「社会工作者」と表記するそうです。僕はこの言葉がしっくりきて、社会に共生社会に向けた種を仕込んで、いつかもっと社会はよくなると様々な取り組みを実践しています。

相模原事件が起きた後に奥田知志さんと一緒に全国各地で共生社会フォーラムに取り組んでいます。相模原事件では犯人が重度の障害のある人たちは社会に必要な心失者となりました。奥田さんの講演会で、ご自身も介護経験がある方が「犯人は間違っている。私は不幸ではない。しかし大変だった。これはわかってほしい。不幸と大変は違う。」と話し、それを受け、奥田さんは「共生社会はこの二つを峻別できる社会、共生社会は大変を引き受ける。絆はひらがなでは「きず」を含む。共生社会は大変を社会創造の契機にできる。そもそも社会は健全に傷つくためのしくみ」としています。

野球部の仲間とはなんだったのかと考えると、人との絆を広げるためには傷つくこともありました。ただ、あなたのことをもっと知りたいという想いだったのかなと思います。お互いが影響しあう中で発達成長できる共生社会の実現を目指していきたい、それは社大野球部が私の源泉だと振り返っています。

### (4) 社会福祉法人芳香会茨城県地域生活定着支援センター センター長 酒寄 学 氏

実践の中で問題意識を持つようになったのは、地域社会に在るより刑務所に戻りたいということ。罪を犯した事件があることを知ったことです。生きづらさを抱えた人にとっての居心地の良さは「地域社会」＜「刑務所」となっていて、社会の中で生きづらさを抱えた刑務所出所者の方の課題にどう向き合うか？ということが日々、突きつけられています。

実践内容の一つが「特別調整」、いわゆる出口

支援と呼ばれるものです。矯正施設新規受刑者の4人に1人が知的障害を有しており、10人に1人が65歳以上の高齢者という実態があります。そのため福祉サービスが必要で且つ出所後、帰るところが無い方の支援を地域生活定着支援センターで行っています。矯正施設入所中に、保護観察所から地域生活定着支援センターに支援依頼が入り、面接を行いプランニングやサービス調整を行い、受け入れ先を確保することとなります。また、本人が受け入れ先に馴染むことができないときは訪問して、受け入れ先を再調整することもあります。

実践内容の二つ目が「被疑者等支援」、いわゆる入口支援です。これは刑務所に入る前の支援であり、逮捕・送検されたものの不起訴処分で釈放される方や、裁判で執行猶予となり釈放される方が福祉的なサービスを受けられるよう支援するものです。

刑務所に入ってくる人の中で知的障害があると疑われる人でも、手帳を所持している人はほぼいません。そのため、障害者手帳の申請や取得、介護保険認定の申請、福祉サービスや入所施設・医療機関への調整支援を行っています。経済面においては、生活保護の申請手続きや調整、年金申請の手続きの代行も行っています。生活面では、施設入所のためには身元保証人が必要となりますが、何度も刑務所に入っている人は身内から縁を切られていることなども多く、調整が難しいことが多いです。また対象者の約20%が住民票を職権消除されていることから、住所が無いと福祉サービスを受けることや相談先が無くなるため、住所設定を行う必要も出てきます。

これらの調整のために他機関と連携することが必要であり、その連携の中で、出所者が差別や偏見の目で見られることもあります。そのようなことに一喜一憂しないということを心に留めて業務にあたっています。

今日は包括的支援体制がテーマですが、その時に私の想いの中では、「個と地域の一体的支援」ということを考えています。一つの事例を通して、その一人の対象者の支援について考えると同

時に、同じ地域に同じような対象者が表れたときに、その地域の関係機関や住民が自ら支援体制を構築できるような関わりが必要だと考えながら支援にかかわっています。一人の生きづらさを抱えた生活者のニーズを充足するために、福祉・行政・医療・司法などあらゆる領域や枠組みを超えて連携、協働することが、あらゆる生きづらさを抱えた方にとって居心地の良い社会を創造することにつながっていくのではないのでしょうか。一人ひとりの支援を通じ、生きづらさを抱えた人にとって、少なくとも「刑務所」よりは、居心地の良い「地域社会」を創りたいと思っています。そして、社会からあらゆる「差別」や「偏見」、「排除」をなくすためには、出所者支援と一緒に経験することが大事です。経験することにより見方が変わり偏見や差別を減らしていくことにつながると感じており、だからこそ多くのソーシャルワーカーや社会福祉の専門職とともに、矯正施設退所者支援における連携、協働を経験していきたいと思っています。

## 5. まとめ

文京学院大学 人間学部

人間福祉学科長・教授 中島 修 氏

皆さんの思いあふれる実践報告をお聞きし、素晴らしいと思いました。時間が超過しているので短く3点にまとめたいと思います。

一つは社会とのつながりの再構築が重要であるということです。今、自治体では再犯防止計画を作っていますが、再犯防止の対象は高齢者や障害者が中心で、福祉の対象と言える方々が非常に多いです。法務省と厚労省が一体になって取組んでいます。もっと我々に身近な基礎自治体で考えていかなくてははいけません。酒寄さんが触れていたように、地域社会より刑務所の方が暮らしやすい、だから、わざと罪を犯して捕まろうとするという話は、さびしい話ですが現実にあることとして考えなくてははいけないと思います。谷本さんの特例貸付の話の中にもありましたが、コロナ禍で孤立、孤独に陥った方々がいたことを考えても、

社会とのつながりがテーマであるということが言えると思います。

二つ目が、社会的孤立、孤独の防止というのがやはりテーマと言えます。孤独・孤立対策推進法が今年4月からスタートしていますが、丹羽さんの報告にあった障害者の多様な社会参加の機会や笹沢さんの少年院での取り組み報告にもありましたとおり、今、学生たちと少年刑務所に行くと社会福祉士が出迎えてくれ話をしてくれます。まさに司法の分野においても社会福祉士のような存在が必要になっているということです。また医療観察法で言えば、触法により医療観察入院し刑を猶予されている方には、精神保健福祉士が対応していますから、ますますソーシャルワークの視点が重要となっている表れと言えます。ソーシャルワークの視点を持って社会的孤立を防ぐことが大切と言えるのではないのでしょうか。

三つ目は、生きづらさを抱える人々への対応です。今日、私のお話も含め、実践報告の中で外国人の方やひきこもりの方、少年非行、出所者の方、障害者の方の社会参加や地域生活、バリアフリーのお話をいただきました。先週、私が所属する文京学院大学で日本地域福祉学会が開かれましたが、その中でもマイノリティーの問題が取り上げられました。マイノリティーの中のさらにマイノリティーの方が例えば出所者の方だと思います。酒寄さんからは、まだまだ出所者の方に対して差別的な対応があるとお話がありましたが、刑務所より地域社会が暮らしやすい、そういう社会にしていかなければいけないと、思いを新たにしました。私は地域福祉が専門ですが、まだまだ地域社会が、一度失敗をして刑を終えて再チャレンジしようとする人たちに厳しい社会なののだということを今一度認識し、どうあるべきか考えていかなくてはいけないと思いました。

社大野球部、素晴らしいですね。これだけ凄い実践をしている卒業生がたくさんいるのだと、あらためて実感し嬉しくなりました。私もこのつながりをこれからも大切にしていきたいと思います。今日はありがとうございました。

## 7. 横山学長から閉会にあたってのコメント

本日、これだけ多くの卒業生の皆さんにお集まりいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

本企画趣旨説明にもあるとおり社大の強みは「つながり」です。とりわけ、準硬式野球部の皆さんのつながりは強固であるということは、これまで何度も、同窓会副会長でもある佐賀県支部長の藤崎さんよりお聞きしてきましたが、今日、そのことの意味があらためてよくわかりました。

同窓会は地域の支部ごとの集まりですが、社大卒業生の横のつながりをもっと強めていくために同学年ごとの支部や、野球部やマンドリンアンサンブルのように歴史あるサークルなどで、同じ体験、同じ場面を共有した人たちが、その経験を元につなげることができる同窓会組織を実現してもらいたいと個人的には思っています。

今日の発表にもありましたように野球部OB、OGには素晴らしい福祉実践をされている方々が大勢いらっしゃいます。ぜひ、今後もこのような集まりを毎年開いていただき、これからもこの「つながり」を大切にしていきたいと思います。福祉の仕事をするうえで、また人々の幸せを考えるうえで、「つながり」こそがベースであると、今日、私自身あらためて感じさせていただきました。ぜひ、社大野球部という社会を豊かにするために、お一人お一人ができることに取り組んでいただき、また、皆さんのお力を現役学生へのサポートにも向けていただきますようお願いを申し上げます。